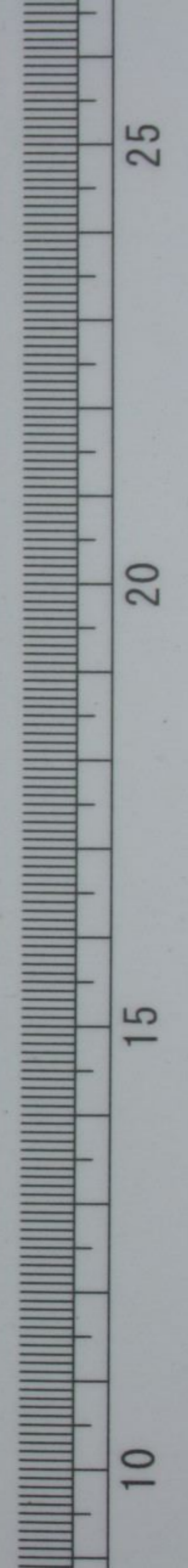




芭蕉翁七書

句令
嵯峨日記
奥乃細道

~ 5
2114
2



門へ利5
2114
卷 2

句合

一番

落 一 番
つらぬ木の葉もさるるさるる

右

左持

落葉

風水

松ちだとしてみ士のつぎふ 塔 一 松 涛

たの句系を微^ミに心を付^カり右又山
もゆらいたるふ^ミの詠め一句のたけもゆた
うみゆえゆるはれども句中目よ見えたる
切字あつくふ字あててそ^ミ流一たれは切
字を加へく見ゆるん^ミさるるや松ふゆた

五十一

らげゝを疑ド〜 持小定めゆるべき丸

二番 左 務 雨相

親と子のまおおをかくみせり 漢石

右

まおふりし羽をかげき かの舟 勇招
ものいぬにまけけごものまらけ一も何れ
たのうみや 秋子思ふにのめし後ひり吉
の二舟に便して遊るの子をいとよまませつ
あやま右の句内もみべきなづら左の句内
逸る水にまけ侍らむの

三番 左 持 ね 眞引

赤笠小月おさへり ね 眞引 工 齋

右

いづれ狸タヌキ得失トク 見えミす たもな 久 隣
その句内さへふりくか入る 持人の乳ウチ容ヨウ
いぶ〜 さまへり右の句もさげ〜 つ〜
云々もた〜 小き〜 え侍れども 其れ失
赤もか〜 仍ヨ〜 持らむ

四番 左 務 桔野

松苗も 枯野 小目どつ 尻り子 松風

右

大橋を枯れ小渡中下日ヶ那 全序

左の句本がらしの吹そして苗松のそよぶと
うごきたる風乃やどり目ふたつべきもの之寸スミ松
軒コウ伊イ米メのまぐくをふくもて一句たけ高し心も
又か水の、風系見拵ぐく休れども苗松
のかこや目ふえはらむ

五、番

左拵

右代

子をつれくおのア細代ヒ子コ薙シ拵ケ 心水

右

細代木のゆらぎやとぬる氷うふ不角
細代の床子子をつれくる他えめづらくて
や内し太又細代の杖乃氷ふとちてき内や
ましたるりた太太さかかぐり

六、番

大橋

石落

破き糸糸の流り糸糸出さ 薙イタキ糸 細柳

右

石まぬや誰が引拵し雪車の如 立三
左の句薙とらひふもの、糸糸方を見ねとを
たると云らむをの、糸糸も思ひのをさられく

上

五十三

をのくゆるふ引換し雪車の句ええと
すねて仍く以爲を務とるり

七采田

右傍

鴨

スガモ 鴨の志年あり渡る月きし 尻雪

右

鴨くいで茶を干枝き 塩屋多 奥児
まど鴨の志年ありまゐる春句限る一白
やまらうふししく教きのりきあそり彼
妹ぐりの二哥を叱ぶれ六月廿四日もま
とつひらむはるるやふやたの句も春を物し

ものくまぬたぬあめも何り水子侍水ども

鴨の志年の志年台と茶茶首とやいむ

八番

右

水柱

凡そ来て水柱ふたがる 楓茶 一排

右傍

山守く采居をしゆるつらく水柱風
水柱ふさがる 楓ほのうたのけしきあてから
びてそねあのふ友ハ秋煙たえづ、やしく
むぐらのほハ水柱に門をけしき、お居の
底ま情おさかりたる 松よれ不えゆる

九番

左持 西散

曉の何れも冬のはゆとくふ 季下

右

木はほく建てる花とむまぬりぬ 伸風
烈火ヒツ風カゼを威嚇イハヒの森ノえ冬ノのまこといへる
ふかくていふも何れもふるかたのく吐ハきつ
びしきふたに又建てるのまぬふたなるさま
よくもまじけらぬりゆすやよとるやよニ師シ日ヒ
が耳ミミをるばたてテ聲コエ妻メが目メはけやをいづき
といふともたたのそれを糸イトぎのり何れ

ハト

十番

左持 神樂

水ミヅ沖ナカ木キや火ヒを悔ユヅ濁ニ土ツチ何ナニやうウ 左ヒダリ東トネ

右

袴ハカマ叩ヒキまのりてねし沖ナカ木キなるハ 孤ヒトリ屋ヤ
たの句クマはきよク籠カゴもたすク秀ヒコとくクふと文フミぶ
たの洋ヨウ叩ヒキ沖ナカ木キよヨあアまマすス日ヒいイくクたタにニ籠カゴのノ
をもてたの方カタ緒オとるルべし

十一番

左持

山里ヤマノや路ミチ中ナカとるルべき人ヒトもなナし 事コト 視ミ水ミヅ

右

山中きぬ出家見らるゝ燈中ハ 舞言
目みよきぬ山中のウのぐるろ子早をとらるゝ
楓林も何のれ右ハ目みよきく程まどき冬燈
のは師人よらうと思はるゝ心むえもるあむた
はささるゝ

十二番

左

煤拵

いづゝみけく拵む煤ららむ 奉白

右膳

煤とりて寺にめでたき佛くら 不ト

煤拵の日乃拵びを倦くも優かて
艶なま太ハ寺に煤拵と思ひやりたる
みまらふやあ句借秘旨のまこととを失ハせ
慈んりきかゝはれどもめでたき佛くら
つひー句のきりひれまきまてきと之俗
まこはる候

一柳新子トのぬーハ身を花樹にほひを
まりて心づいハそゝる山の志松をたごめ
何より一の花ふなを思ひぬ水の月小
花の色をうづべく風符のやつことなし
辛何れも心づり先も柔歌まゆりあそ
びふなぶといども春秋まきくそりるぬ
ごこーく新舞のまき名をばあぐふ
花の牡丹も花を交えを突よみ梅の徳
梅の無も折ゆみき時ふたがハ白も又
人をなすーむれはまきけき梅ふ入く

花のまは清きにつきいろと花本のまを
拾ひくた右ふかち積て四の昂とま
判士四人ふとくく花も艾一ふまこがふ
や楽がうふまらるものゆめをぬまむふ似
た水ごまといハむはれごまアラサキの目をぬ
ひ何ふむの口を戸ざむこと何くハむ貞
享くのとー筆を江上の水子ろごて
つひふ蕉菴雪夜のともーびに對す

柳まき

嵯峨日記

元禄四辛未卯月十日嵯峨小松びくま
東ヶ落柿舎子む。此北とてに東アア、
善に及びて京に阿る事ハ於鞍シバとむべき
よーおく疎子てぐりサ薄川ムガりるぐり舎
中の片隅一石なる不伏所と定む
机一硯文庫ブ白ハク氏シ集シウ
本館一人一首世ヨ世ツキおぐり

原氏お徳土佐日記松多と集を魚イサ夜の
蔚ヒキ陰エまぐるる玉童乃室に隅くの草クサ子ミを

蓋名一壺イツコ盃コ盃コえたる王叔の衾ツツ洞ツツ世ヒムの
おども京より持事りて多タ一ヒムからどヒム家ヒム公ヒム貝
賤ヒム成ヒム忘ヒムきヒムくヒム法ヒム果ヒムよヒム楽ヒムむ

十九日午半ヒム比ヒム川ヒムさヒムにヒム詣ヒム

大井川おふ流ヒム水ヒムくヒム山ヒム丸ヒム山ヒムたヒムふヒム高ヒムくヒム松ヒムのヒム尾ヒム
乃里ヒムふヒムつヒムでヒムけヒムりヒム壺ヒムやヒム菰ヒムふヒム詣ヒムるヒム人ヒム僅ヒムくヒムふ
多ヒム一ヒム松ヒムのヒム尾ヒム林ヒムの中ヒムふヒム小ヒム智ヒムをヒム敷ヒムくヒムふヒムふ
さヒムべヒムくヒム上ヒム下ヒムのヒム嗟ヒム呼ヒム平ヒム三ヒムはヒム何ヒム里ヒム
つヒム水ヒムたヒムくヒムふヒムあヒムらヒムむヒム彼ヒム仲ヒム玉ヒムがヒム狗ヒムとヒムめヒムたる
不ヒムとヒムくヒム狗ヒム留ヒムのヒム傍ヒムとヒムつヒムふヒムはヒム何ヒムくヒムりヒムふヒム侍ヒム水ヒムがヒム志

ばらくヒムはヒムふヒムよヒムるヒムべきヒムまヒムやヒム墓ヒムハヒム三ヒム間ヒム屋ヒムのヒム隣ヒム教ヒム
の内ヒム平ヒム有ヒム志ヒムるヒム一ヒム小ヒム橋ヒムをヒム植ヒムくヒムりヒムがヒムこヒムくヒムもヒム海ヒム
彌ヒム躰ヒム屋ヒムの上ヒムにヒム起ヒムれヒムしヒムくヒム終ヒムふヒム教ヒム中ヒムのヒム花ヒム
芥ヒムこヒムたヒムらヒムりヒム唯ヒム君ヒム村ヒムのヒム柳ヒム巫ヒム女ヒム殿ヒムのヒム花ヒム此
むヒムのヒムしヒムもヒム因ヒムひヒムやヒムらヒムるヒム

うヒムまヒムふヒム一ヒムやヒム竹ヒムのヒムのヒムなヒムるヒム人ヒムのヒム果ヒム
山ヒム丸ヒム山ヒム教ヒムのヒム志ヒムげヒムりヒムやヒム凡ヒム乃ヒムたヒムぢヒム
科ヒム目ヒム及ヒムびヒムくヒム是ヒム後ヒム杯ヒム今ヒムふヒム海ヒムるヒム凡ヒム水ヒム京ヒムより
来ヒムるヒム去ヒム来ヒム京ヒムふヒム海ヒムるヒム音ヒムよりヒムりヒム也ヒム
廿日小嗟ヒム呼ヒムのヒム旁ヒム見ヒムむヒムとヒム狗ヒム紅ヒム尾ヒム来ヒムるヒム去ヒム来

途中の歌とが詠る

つうと阿ふ子たのたけやまな白田

落柿舎ハむののぬ乃他まゐるまのふし
く家く頼破さ中くふ作りみぐく水る昔
のちあより今の何り水るさあさうさ
ま丸形さし海茶画る破も凡ふ破水るふぬん
く奇石怪松も津の下にかく水る竹極
のあふ袖の本一本茶茶さしりんバ
袖の花やむのの忍む料理の
子視大竹ノ歌をまゐる月歌

又やとむ西復盆子何くらめ嘆詠の山

去来兄の空より菓子桐葉の物ちごとく
りくく音ハ羽紅夫婦をとく欠く散屋一たり
小五人とぞり外たれバおもひぬごとくお半
るよりも各起おくく菓の菓子分四たをくえ
出く暖ちくくさまでさあし明ささくまの百
凡れがむふ脚くるふ二菓の散屋子四園の
人ふ一たり思ふより四中くくさるも又四行と
まるあくたるるるもたのどく出く笑大ぬ

明水に羽紅ん此京ふゆるま末をふとまある

廿一日

時あいなぎりり水ばんむつ〜くそのりまも
時月ふ似ぎれれすりうちまやりあおくまづ
る水が流日眠ふりり苦ふ及び〜くま末
ふゆると扱人もたなく〜外た水が扱も麻
らぬぬす〜小位位菴あ〜く書きて〜あるる
残るす出〜して願ナラサミふ法出
廿二日
於のる毎降今白人もたなく淋シまあふ

むだま〜く扱ふ甘言

粟モふ居る者ハ然を何ぞ〜

酒をのむものハ、牛乳何〜と云

終子位ある者ハ終をある〜

意に位ある者ハ意成ある〜

世〜はを〜く〜らま〜し〜西上人の〜

ははび〜さを何〜と云〜るべ〜又よ〜

山里ふ〜又後をよ〜と云

ひ〜り〜は〜の〜も〜思〜ひ〜し〜もの〜を

猶もむねど面白まハなり〜長ナヨク嘯シヨク位士の曰

空右ハ半日の涙をばれ北ハ半日の涙を去ふ
まふ者も時ごとく常子憐^{アハシム} 予も亦
うき家を淋^シがらきよかむと
と^シ何る事に猶居^シいひ^シ句と
昔言^シ去来より消息^{シテウツク}きてあが衣^シに
ゆり^シゆるくて朋友^シの消息^シども何ま
存^シく史中曲水^シ吹^シよ^シ予^シが^シま^シま^シて^シ一^シ若
差^シの旧^シ泣^シヨ^シ等^シ了^シ宗^シ波^シに^シを^シ屋^シ
む^シの^シ誰^シ小^シ沼^シ洗^シひ^シ一^シま^シま^シ水^シを
又云

家よ^シも^シ不^シら^シ杖^シ二^シ長^シを^シり^シめ^シふ^シ一^シて^シ楓^シ一本^シ外^シ
た^シま^シま^シを^シま^シま^シと^シま^シる^シ
わ^シ楓^シ茶^シを^シふ^シた^シる^シも^シ一^シ片^シり^シ
嵐^シを^シま^シが^シみ^シり^シ
約^シ春^シの^シ花^シに^シ惹^シら^シる^シを^シ歡^シう^シ
出^シ代^シや^シ幼^シと^シろ^シふ^シもの^シ何^シり^シ
廿二日
ま^シを^シお^シバ^シ本^シ認^シ小^シめ^シる^シ其^シの^シ月^シ
百^シの^シお^シや^シ本^シ認^シ小^シめ^シる^シ下^シの^シる^シ
巾^シの^シ子^シや^シ幼^シき^シ時^シの^シ陰^シれ^シま^シひ

麦の穂や淺く欠て鳴き聲
一日く麦の穂くらきて啼

能く一の麻多し。永を刈て子

廿四日

頌落柿舎

豆の穂も細も本粒屋も花不き
凡此

麥不及く去來京より來る

膳所昌房より消息

大津尚白より消息有

凡此來る堅田本福寺より

新干春伯

凡此京より來る

廿五日

子那大津小島

史邦夫草花行

題落柿舎

對深吟山峯伴多魚乾荒古此似理人店

枝頭と欠去帆印青糸分仄堪學虫

尋小智墳

強攢悲情出扉之一篇吹月夜お風苦

季僅に亦た若何を孤墳竹樹中
芽出より二葉に茂る柿の葉 夫子

途中

杜宇^{ホトギス}啼や 枝もろ久さら 史邦

黄山谷の詩句

杜門子見自休す己對空の揮毫
筆が水に流て糸まうて武江のち
中 字幅^{カイ}五ふ依
循一卷之内

羊俗の膏^{コウ}茶^{チャ}入ふふところ

白井^{ハクイ}峠^{トウゲ}を馬^{ウマ}かこき 其角

縛^{シバ}の篋^{カネ}小^コ粗^ロはさるる月

壁^{カキ}ふより人^{ヒト}は渡^{ワタ}る小^コ屋^ヤ一^{ヒト}つ

うつの山^{ヤマ}女^メにあ^ア息^イを借^カる^ル標^{ヒシ}

俗^{ソク}せ久^クく^ク ちる^{チル}精^{セイ}色^{シキ}

申^{ウチ}の時^{トキ}計^ケより雷^{ライ}電^{デン}降^フ陣^{ジン}龍^{リウ}空^{クウ}を^ウる^ル時

を^ウ降^フ大^{ダイ}き^キの^ノから^カも^モの^ノめ^メし^シ小^コキ^キハ^ハ茶^{チャ}栗^{リス}の^ノめ

廿六日

芽^メ出^デより二^ニ葉^{エフ}ふ^フ茂^モる^ル柿^{カキ}の^ノ葉^{エフ} 夫子

白^{ハク}田^{テン}乃^ノ茶^{チャ}干^{カン} か^カ萩^{ハギ}卯^ウの花^{ハナ} 蒼^{ソウ}彦^{エン}

帽^{カブ}年^{ネン}た^タの^ノも^モ一^{ヒト}げ^ゲる^ル角^{カク}拵^{ジウ}て 玄^{ゲン}束^{ソク}

人のくむうち 物^ツ瓶^{ビン} 結るり 夫^ツ草^{クサ}
有^ツ明^{メイ}子^シ三^{サン}度^{タク}花^ハ紙^シの^ノ行^{ユク}や^ラむ 乙^ニ品^{ヒン}

廿七日

人^ニ子^シ東^{トウ}渡^{タク}日^{ニチ}松^{ソウ}

廿八

善^ニ子^シ杜^ト玉^{ギョク}が^リり^を云^{ハク}出^デく^を賢^{ケン}る^心心^ニ子^シお
交^スる^時に^善善^ニを^なま^き陰^{イン}長^{チヤウ}て^火火^ヲを^ゆめ^めと^所所^ニ
衰^{オホ}く^水水^ヲを^善善^スる^る花^ハを^友友^ヲを^合合^ス時^{トキ}時^ニ時^ニ
花^ハを^ゆめ^め見^ミ糸^シ帯^{タイ}を^衣衣^ス森^{シン}ま^まる^る時^{トキ}に^蛇蛇^ヲを^善善^ス
善^ニを^るる^とと^之之^リ腫^{シュ}枕^{ゼン}記^キ有^ク槐^{クワイ}安^{アン}國^{クニ}莊^{シヤウ}

周^{シユウ}善^ニ欒^{ラク}皆^ニ其^ノ理^ニあ^らく^妙妙^ヲをつ^くさ^だ赤^{セキ}ゆ^め久^ク
聖^{セイ}人^{ニチ}君子^ノの^善善^ニに^何何^ラぞ^流流^ル白^{ハク}忘^{ワウ}忘^ス也^ヤ也^ガ也^ガ也^ガ也^ガ
の^氣氣^ヲお^陰陰^ニ善^ス又^リり^り流^ル小^{シユ}時^{トキ}に^善善^スを^ゆめ^め
る^る所^{トコロ}所^ニ謂^{イハ}念^ニ善^ス也^ヤ也^ガ也^ガ也^ガ也^ガ也^ガ
伊^イ里^リま^まる^るく^去去^ルく^心心^ヲあ^りて^扱扱^ハ床^{トコ}を^危危^シく^起起^ス
起^ス卧^イり^依依^ルの^功功^ヲを^助助^スる^日日^ヲが^禮禮^ノ親^ニの^めめ^く
め^く保^ホ子^シ片^ハ時^{トキ}に^難難^シ水^{スイ}を^何何^ラも^時時^ニに^たた^ハむ^れ或^シ
時^{トキ}に^吾吾^ノ心^ヲ意^ニ子^シ傑^{ケツ}く^忘忘^スる^る中^ニ中^ニ有^クる^水水^ハある^る
を^して^又又^決決^ヲを^しる^る

廿九日

七

三十一

又音奥抄高館の侍をこゝる

高館從尊天皇似曹衣川通海月如弓
其地風系柳以不叶古人不立其地時
不叶を系

晦日

朔日

江島平田明昌寺李史比阿

尚白千那消息を

牛の子や吹流され—後の霧 李史
此ごろのれはまよつ—卯月子 尚白

遷岐

まゝ水つる五月も近—ルユ知年ギキ粽

二日

曾良来りく—芳建へ茶を可守能成不語
侍るよ

衣は旧友つ人のを子—彼をこゝろおせて徒
能建路や分つ入バ夏小海

大峰やよりの奥も共小景

夕陽みか—ミ大井川船を浮べく嵐山
にろめて戸ト絶サ漸をのぐる西降出て暮る小

及びくゆる

三日

昨夜の雨陣つゞくが昨日終に止む事な
其衣にはよるども向後既にあめ

四日

今日の雨降りりり予の外は終日雨
雨降やむ

明日は雨降やむを止むべくは
此の奥にの一日は

五月の雨やき

おくのふら及

月日百代の夏家やうわきも又旅
人なりお乃とふ生涯をうへ馬の口とらへて
老をむりあるもの八日と旅して旅を極と
吉人も多く旅よ死さる有り事もつれ
なよりり片雲の風に吹らハく海濱乃
思ひやまぬ海濱よちまらへ去来の秋にと
の破屋小軒の古巣をいらひてやへ
春立る霞乃空に白川の川
乃神のもたよつさて心をくるは

のまねきふ何ひて取ものよみつらむぞも
破れつりけさの然付くへく三里ふ^{ニウ}炎^{ニウ}馬^{ニウ}
るより松島乃月走心よかまで住る方ハ
人^ニ不^ニ徳^ニ王^ニ松^ニ風^ニが^ニ別^ニ路^ニに^ニ移^ニる^ニ平^ニ
草のたも住居る代ぢひるの家
番八句を庵の松よかけ糸は生も末の一日
明不のくや^ニ流^ニくくして月ハ在ぬま^ニ光^ニ
おさ^ニの^ニ流^ニる^ニもの^ニうら^ニふ^ニ二^ニの^ニ峰^ニ出^ニみ^ニえ^ニく
上^ニ津^ニ谷^ニ中^ニの^ニ花^ニは^ニ指^ニ又^ニつ^ニら^ニと^ニ心^ニ不^ニそ^ニし
むつま^ニう^ニさ^ニか^ニぎ^ニり^ニを^ニ音^ニより^ニつ^ニご^ニひ^ニて^ニみ^ニみ

よみて送る子トおもてを^ニよ^ニま^ニて^ニ船^ニを^ニ何^ニれ^ニが^ニ
お^ニ途^ニ三^ニ子^ニ里^ニの^ニね^ニま^ニひ^ニ袖^ニよ^ニさ^ニぎ^ニり^ニて^ニ知^ニの^ニ
ち^ニま^ニに^ニ離^ニあ^ニ乃^ニ泪^ニを^ニろ^ニく^ニ

川春や^ニな^ニの^ニ時^ニ負^ニの^ニ目^ニハ^ニ泪^ニ

是^ニを^ニ矢^ニ立^ニの^ニは^ニれ^ニ無^ニと^ニく^ニ行^ニ及^ニな^ニぬ^ニ
ま^ニだ^ニ人^ニの^ニ途^ニ中^ニよ^ニ立^ニあ^ニら^ニび^ニて^ニ悔^ニり^ニげ^ニの^ニ
る^ニゆ^ニの^ニ直^ニり^ニと^ニ見^ニ送^ニた^ニる^ニべ^ニし^ニこ^ニと^ニし^ニえ^ニ程^ニ
二^ニと^ニと^ニお^ニや^ニ奥^ニ羽^ニ長^ニ途^ニの^ニ折^ニ旅^ニ三^ニか^ニり^ニそ^ニめ^ニ
思^ニひ^ニら^ニち^ニて^ニコ^ニ天^ニよ^ニ白^ニ髪^ニは^ニ眼^ニを^ニと^ニり^ニぬ^ニとい^ニ
へ^ニども^ニ耳^ニよ^ニふ^ニれ^ニて^ニい^ニま^ニす^ニご^ニめ^ニみ^ニら^ニぬ^ニさ^ニる^ニい^ニひ^ニ

生しく海らばと云なきれの本もけ廿八日
漸早加と云者ふをどり先ふりり夜宵の
肩ふがきる物先くるむ只名まらりて
出立付を段の衣一衣の扱の隙ラセギきゆくも具
墨筆のたぐひ何るはけうがときサキケ何たぐとた
るはまきぐよ打拵ぐくして政政のコソイ物とふれる
ころつりみるれ

室のハ鳴ふ詣ま回行普良が曰け仲ハ本
の花はくや娘と中くムコ一舞士一舞るり毎戸
室ふ入くシツ梅のふちういのみと中ふホ穴デく出見

のみとく生れぬひより室のハ鳴とリ又控を
よと習い一侍るもこの謂也於この一ムコと云
多を様ふや縁起の旨世ふ侍あるも侍一
世日日光山の林下泊る何るトのそらるや
赤衣名を佛五たあつと云茶の西衣をらりて
るあふんりりハ中侍ま一あのみ乃花も
打解く体くぬと云いなる佛の漏世シヨウセ花
土に示現ジゲしてある葉洲エムのとをシツ明シツ礼レごと
きの人をたまはぬよやと何るトのあまき
ふ心をとめてみるに時を刻を分るに

して正を偏固の者也剛毅木訥の仁よと
きたぐい氣稟の潔貨をそまぶべし
卯月朔日沛山小指撫去住昔成山を二
荒山と書しを海大師写基の時日光
と改めふふ葉末末を内りりゆふやと
は内史一天子かききて思深ハ表にあふれ
四氏安堵の栖根をり 於收多くて筆を
しーとぬ
何らた〜と書ふ美ふの日記光
思深山ハとありりて雪いすべし

糾擗て思深山平〜ころもかへ 曾良
若るいほ合氏〜〜思ふ何といつり若
意の〜為あふ彩をちあらべてるがせ水の水
をた〜〜との〜びね〜ま名〜深の賦共ふ
きむ〜を収び旦ハ羈旅の程を〜らむと
旅立睡髪を剃〜墨傑ふはあをう〜思
五をひて字語とす仍て思深山の句有
衣更ハ二字カ何めてき〜ゆ
甘好丁山をたつく澗有岩洞の頂より
ふぼして石尺子定の物深〜ふはたれ定

穴屋女子をひらめくは能の意よりいふべ
くは井の能と申付へ侍る也

替^カ時^{トキ}、庵^ア子^コ能^ノるや、夏^{ナツ}の節^ノ

那^ナ須^スの里^リをぬくつ子^コあふ人^{ヒト}何^{ナニ}水^{ミヅ}は是^{コト}よ
里^リ理^リ越^ク小^コか^カりて^テ道^{ミチ}をゆく途^ツ
小^コ一^{ヒト}村^{ムラ}と見^ミけり^{ケリ}小^コあ^ア津^ツ日^ヒなる農^{ノリ}
夫^{ソノ}の赤^{アカ}小^コ一^{ヒト}板^{イタ}を^カりて^テ水^{ミヅ}は又^{マタ}中^{ナカ}を^カ
る^ルこに煙^{ケムリ}の^ノる^ル阿^ア里^リ茶^{チャ}刈^キを^カの^ノこ^ノ小^コた^タが^ガき
小^コあ^ア津^ツま^マとい^イつ^ツも^モさ^サま^マが^ガ小^コ情^{ナリ}一^{ヒト}ら^ラぬ^ヌ小^コ
あ^ア津^ツい^イづ^ツま^マへ^ヘさ^サや^ヤき^キぬ^ヌも^モは^ハ理^リハ^ハ縦^{タテ}横^{ヨコ}平^ヘ

わう水^{ミヅ}て^テろ^ロぬ^ヌく^ク後^{ノチ}能^ノ人^{ヒト}の^ノ及^キあ^アを^ヲた^タぐ^グむ^ム何^{ナニ}や
一^{ヒト}つ^ツ侍^シ水^{ミヅ}は^ハは^ハる^ルの^ノこ^ノま^マる^ルあ^アま^マく^クる^ルを^ヲ正^{ただ}
由^ユ一^{ヒト}が^ガ侍^シぬ^ヌち^チひ^ヒは^ハき^キま^マの^ノあ^アり^リき^キの^ノ改^カま^マ
ひ^ヒて^テは^ハる^ルひ^ヒく^クめ^メハ^ハ小^コ娘^{ムスメ}あ^アて^テ名^ナを^ヲか^カぬ^ヌと^トい^イ
す^スる^ルぬ^ヌ名^ナの^ノや^ヤり^リ一^{ヒト}ら^ラぬ^ヌ水^{ミヅ}ハ

か^カき^キぬ^ヌと^トハ^ハる^ル名^ナ子^コの^ノ名^ナ成^{ナリ}を^ヲ一^{ヒト}

初^{ハツメ}て^テ人^{ヒト}里^リ小^コあ^ア津^ツは^ハ何^{ナニ}を^ヲ能^ノと^トい^イふ^フ法^{ホウ}付^ケ
くる^ルを^ヲひ^ヒら^ラぬ^ヌ

黒^{クロ}羽^ハの^ノ鍮^{カウ}代^{ダイ}浄^{ジヨウ}坊^{ボウ}さ^サ何^{ナニ}が^ガ一^{ヒト}の^ノ方^{カタ}に^ニさ^サる^ル思^{オモ}
ひ^ヒら^ラぬ^ヌ何^{ナニ}の^ノ暇^{ヒマ}び^ビ日^ヒ板^{イタ}徳^{トク}づ^ツけ^ケて^テ才^{サイ}

枕をなると云が然る勢とやらひ自のちゆも
 伴ひて親^{シム}属^{ダク}の方^{カタ}あもまぬうれりをもあるや
 おひら^コの^コ部^ブの^コ小^コ道^{ミチ}の^コ途^ツ——とく大^{オホ}道^{ミチ}の^コ終^{ハシ}境^{キリ}
 一見しぬ頂の^{シラ}條^{ハシ}糸^{イト}を^シり^テ玉^{タマ}簾^シの^コあ
 け古^コ墳^ムを^シと^シめ^シり^ハ情^{ナリ}を^シ指^{サシ}す^ル市^チ
 扇^アの^コ射^シ時^{トキ}あ^リて^ハ赤^{アカ}國^{クニ}の^コ神^{カミ}正^{マサ}
 ハまむとちうひも^シ神^{カミ}社^ヤの^コ侍^{サマ}と^シバ
 慈^ニ息^ノ存^シ志^スき^リの^コ小^コ道^{ミチ}の^コ途^ツ——とく大^{オホ}道^{ミチ}の^コ終^{ハシ}境^{キリ}
 徳^{トク}強^{ツヨク}光^ヒ明^{メイ}さ^スと^ク云^フ有^ルと^ク云^フぬ^ルて^ハ引^ヒ者^{モノ}

堂を拵中

隻山小^ア屋^シ跡^ダを拵^シ首^カ進^シう^チ

高^{タカ}山^{ヤマ}を^シ岸^キさ^スの^コ松^{マツ}小^コ佛^{ブツ}頂^{トウ}初^{ハジ}高^{タカ}山^{ヤマ}に^シ法^{ホウ}者^{モノ}

双^{フタ}横^{ヨコ}の^コ五^イ尺^{シヤク}又^{マタ}た^ラぬ^ルの^コ度^{タク}

む^シま^シふ^シも^シく^シや^シ——^シぬ^ルあ^リり^シと^シバ

と^シ松^{マツ}の^コ炭^ス——と^シ定^サま^シさ^シ付^ツけ^ルとい^フつ^シを^シや

き^シと^シえ^シぬ^シふ^シ其^{ソノ}法^{ホウ}と^シむ^シと^シや^シ存^ゾさ^シふ^シ杖^{シヤウ}を^シ曳^ヒく^シ

人^{ヒト}く^シさ^シむ^シぐ^シた^シふ^シい^シざ^シあ^シひ^シぬ^シと^シ人^{ヒト}松^{マツ}を^シ

る^ルの^コ舟^{フネ}ど^シ打^ウち^シと^シき^シく^シ松^{マツ}が^シ文^{モン}ど^シ彼^カ杖^{シヤウ}が^シ

ひ^ヒら^シる^ル山^{ヤマ}ハ^シた^シく^シあ^シる^ルに^シ引^ヒき^シよ^シて^ハ谷^ヤ道^{ミチ}の^コ途^ツに^シ

松林黒く苔まきなりて卯月の瓦を於き
し十景にまき不機をりし山門入
りしかの法いづめの不どるやと後の山にあり
のが氷石上乃小庵定座おまきぶくけ
たまぬ縁何の死飛法や法沙のふま
をみるがめし

キツキ 本町も庵ハやがらぎる本立

とていへぬ一句を柱に飾りしをより殺
生石ふ川鉄代よりりるのく送らるは
つけのをれと短冊ぬきよとちやけり

を屋侍るまのうると

聖を撲ふるモキおけのほくし

殺生石ハ澄白水の出る山陰の何里石の毒氣
いまごるろびや蜂蝶のまぐひまの砂のるこれ
見えぬほどなきあり死す又清水たぐるの
柳ハ葦原の里ふ何りそ田の畔お飾るは不
乃郡守元於某のは柳みまがやをくおふ
のたまひききえぬのつをいつてのるともやと思
ひしを令白は柳のうげさるるまより清水
田一板掩くまきる柳うふ

心許る多き日敷なをさるるまのふら川の舟小
かゆりて旅ん空りぬらうで都て使求も
引之中もは舟ハ三舟の一舟とくは探の人
心をこむ秋風を耳小舟一ひ多ふを僕
中一とく多あゆの指於何りぬるり印の花北
白妙小後の花乃咲そひて雪少もこゆる
あちちとある吉人冠を正し衣襟志を改
しりちをどは補の筆おもとめふれ
とぞ
卯の花をかばし開の晴見らる 曾良

とかくして越りまふ河少くは川を渡る
津松高く在ふ定城相馬三春の在常陸
下碇の地をゆくひく山つらなるうげはとつ小
おをり今白ハ元早てお糸くつらぎまわり
川の驛は等定船とつあものを守て四むらと
めらるる是白河の舟つらよこえつるやしらむ長
余のくるるこがみつら小且ハ風系ふ認めら
り小懐旧小物を遊てえりくく思ひめら
さむ

風流のりめやおく乃田柱く

毎下ふこえむもさききぐりし 語水が紙才三つ
づけて三巻とありぬ

此者の儂おぼろよ大ききる栗の本陰をたのしめて
世をいとし僧有縁ひらふを山もかくやと問ふ
つえらゆきもものふ年付ゆる 其詞

栗といふ字ハ西の本とせて西方

浄土方便ありと 行基ギヤウキ菩薩ボツサツの一生

杖ツエも抱かかりもけ本を用ひふとらや

等宿トウシュクが宿をせしむる計 杖ツエ皮の宿宿を
たるきて何さる山を 及よりりせし何あり

何多し かつし刈取もやいふなるはづづ水の

若きを花がつくとハをぶと人ふ若侍ニヤクれども

更ふ知人なり 流を尋人ふとひかつしと

若ありきりて日ハ山の塔ふかまぬ二本松あり

たふき水く黒塔のまを屋一見し

福崎フクサキよやむる何れハ志のぶもぢチ摺シの石を

尋く思ふの片ハルカより山陰のやまふ石

半ちゆ埋ウレぐ何ま望のまをアのまありておぬ

乃る昔ハ山の上ふ侍コトコを往來の人此書

若のを何りてはるを紙コトコ侍コトコあくとては

谷小つき流き石の面下はまふあ ちりて
いよちもあふべきるのや

早苗とるよまもや 昔志のぶ指

目の端乃わくを越く際のとく者も出つ
佐美彦目が旧海^ハたの山際^フ里半^リ牙^ハは有
飯^イ城^シの里^サ結^キ理^リと^ト中^ナく^クい^イふ^フ友^ト山^トと
ち小^コる^ル所^トく^クる^ルそ^ト彦^ト目^トが^ト旧^ト館^ト之^ト林^トに^トた^ト子
の^ト行^トく^ト人^トの^トあ^トゆ^トよ^トあ^トう^トと^トく^ト 泪^トを^ト流^トし
又^トく^トく^トら^トの^ト古^トさ^トに^ト一^ト家^トの^ト石^ト碑^トを^ト海^ト中^ト
も^ト二^ト人^ト乃^ト嫁^トが^ト志^トる^ト一^ト先^ト志^トく^ト 廿^トる^トい^トよ^トか

ひぐしき名の廿小きとえつるおうる 袂
をぬらしぬ^ガ浪^ル乃^ル石^ト碑^トも^ト志^トき^トふ^ト何^トら^トぞ
さ^トふ^ト入^トく^トと^ト茶^トを^トと^トへ^トば^ト家^ト小^ト美^ト少^ト種^トの^ト友^ト刀^ト并^ト
茶^トが^ト袋^トと^トあ^トで^ト什^ト物^トと^トま^トす

ひ及もた刀も五月小ぢれ泉の懺

五月新白のりく其お飯城ふとある 温泉
何きバ^ハは^ハふ^ハ人^トく^ト宿^トを^トと^トる^トに^トち^ト彦^ト小^ト蓮^トを
茶^トあ^トく^ト何^トや^トき^ト彦^ト家^ト之^ト竹^トも^トた^トら^トれ^トあ^トり
ま^トの^ト中^トう^トげ^ト小^ト舞^トふ^トを^トま^トけ^トく^ト小^トま^トお^トふ
入^トく^ト雷^ト鳴^トる^ト志^トき^トり^ト小^ト降^トて^ト却^トる^トよ^トり

もろくも^カ校^カせ^カら^カけ^カく^カ 眠^カら^カぎ^カ持^カ病^カさ^カん^カれ
こり^カく^カ 滑^カ入^カ汁^カふ^カち^カむ^カ 短^カお^カの^カ元^カも^カや^カり^カ
明^カき^カバ^カ又^カ筋^カ立^カぬ^カ 於^カお^カの^カ余^カ波^カ心^カま^カく^カま^カひ^カ
馬^カう^カゆ^カく^カ 葉^カお^カの^カ彈^カ小^カ出^カる^カ 色^カな^カる^カ 引^カ来^カ
を^カか^カえ^カて^カ 形^カる^カ 病^カ是^カ来^カる^カ 一^カとい^カへ^カど^カ 鞆^カ旅^カ
鳥^カ古^カの^カ行^カ脚^カ持^カ身^カ無^カ老^カの^カ親^カ念^カ及^カ筋^カふ
志^カお^カむ^カ是^カ天^カの^カ命^カ有^カめ^カと^カ業^カ力^カ 柳^カと^カり^カ 志^カ
筋^カ從^カ撲^カ小^カ踏^カく^カ 伊^カ達^カの^カ大^カ本^カ戸^カを^カと^カま^カ 徒^カ
持^カ白^カ石^カの^カ標^カを^カと^カま^カ 崎^カ乃^カ郡^カ小^カ入^カル^カ 巴^カ菴^カ中^カ
於^カ実^カ方^カ此^カ地^カハ^カつ^カの^カ色^カと^カあ^カら^カむ^カと^カ人^カよ^カと^カハ^カ

是^カより^カお^カこ^カち^カふ^カえ^カゆる^カ 山^カ際^カの^カ里^カを^カみ^カの^カわ^カき^カ
崎^カと^カ云^カ及^カ筋^カ神^カの^カ社^カか^カと^カ乃^カ筋^カ乃^カと^カは^カり^カ
と^カ又^カお^カの^カ五^カ月^カ毎^カふ^カ及^カつ^カと^カ何^カく^カと^カつ^カ
う^カ此^カ地^カ色^カバ^カよ^カと^カる^カが^カら^カ 睡^カや^カり^カて^カる^カふ^カ 恙^カ
痛^カは^カと^カ崎^カも^カ五^カ月^カ毎^カの^カお^カお^カ水^カく^カり^カと^カ
い^カと^カ崎^カハ^カつ^カと^カさ^カ月^カ乃^カぬ^カり^カと^カ
志^カは^カ小^カ宿^カる^カ
武^カ徳^カの^カ松^カも^カと^カそ^カめ^カそ^カる^カ心^カ地^カを^カ水^カ松^カハ^カち
際^カより^カ一^カ本^カに^カわ^カり^カて^カ 昔^カの^カ地^カあ^カら^カし^カる^カと^カぎ^カ
と^カし^カら^カる^カ 人^カ能^カ周^カ法^カ沙^カと^カい^カ出^カ徒^カ昔^カむ^カつ

廿二
のかしこく下りて人け本を依きく名元川の
檜ハシ板ガをせらぬるるりちのど何れ水や松ハ
はらび伝もなきとハ伝つり代り何るハ伐
或ハ植はをどきとすふ今ハ松ハ子菜本の如
ちこの不ひくめでたき松のルレ引きよちむ
付し

武隈の松もやをよきとらと筆白
とりもの傳はなきりら松ハ
松より松ハ二本を三月越し

名元川を渡りて仙真山入何や久みく日也

猿宿をもちめく四五日日滞り由り心を盡し工
加ははつと云もの何を神心何るものくゆく
知る人んあるこの者ま比さびびららぬ名
どころを考る至る侍ればとて一日日案念するま
城の松林茂り何らて秋のき思ひやら
る玉田のあらむつドグ思ひ何らいい笑らん
日親もらぬ松の林ふ入く案念を本のトと
云とが昔もがく事あらけきらをみきら
ひかきこといのみく水せま何れ天神の水
社るどおて甘白いく水ぬれ松を置きらる

のふく画ふ少くはくは且徳の深淵つけ
たる草鞋三足徳をさきばさう風流の
形もの定ふふりく其美を歌す

何や久きよふ洗つむ草鞋の徳

かの画墨よまうとくをどりけはくへの
海道北山際に十符の草有ともまう
十符の草草を御て国守に就むとそり

壺碑

市川村多賀城小右

つ不の石ふそハ高廿六尺餘横三尺中
苔を空^{ウカキ}くふ字出也四維国界之數

里を志る也此際神龜元年將軍使
鎮守府將軍大野朝臣東人之所立
也天平宝字六年參議東海東山節
度使同將軍惠美朝臣朝猶徳造而
十一月朔日有石武皇大帝の時平
尚きりむのよりみむる也枕多く
徳侍ふといふも山崩川流て乃河らたよ
石石に埋くちふかみ本ハ老くは本にハ
此の時柳り代名く其流けらるらぬ
そののこをふむて疑あの子葉の

記念今此其の古人の心を遊ばしけり
徳有命の収び覇旗の功をわきまきく
泪も落るばりりり

る水より建田の玉川沖の石を尋ぬまに
山より小松のほひく皆首巻るまでを
かり枝をつらぬる葉の末も終ハかろの
ごときとぬくさもあきりて、壱ぐりの浦
ふ入おのぬをす有るのて、柳をわくく
月夜出小籠が鳴もほご色く延のあふ
こぎつはく有りつたなりくよつまでかろ

もとのみくを心も考らぬくいとど表に其
灰目首法河の波ををわりて奥海邊
理とをものをわくる平家もわらぬ
もわらぬひたぬく。調子も上く抱ち
くくもやしくんぐさやがにるよとのえき
げもものくは佳縁にそらるる不朝壱ぐり
の神は指圖する再興もわらぬくを極子と
く彩ササ初ハツきくらびやうふ石の階キハシ九ク仞ハシ子シまり
朝日あらの玉ぐきをかやぐまがるる果
若土の境月で外シマ靈レイ何らたまふ由也

六十一
さう吾國の風俗あるといと貴く水神お
平古こ室物有かねの戸びらの面はふ治
三才知泉三才を造と有五るままの傍
今目のあふうびくろる子神一渠ハ勇
義忠孝乃士也佳命々ふひりて志こふ
とふより事一誠よ人を道我勤美をさ
るべし後もまゝいそに志くわくさり日既
午おちりし一船をわりく松崎よつる女間
二里餘雄雉のぬふく
柿こふりけいれど松嶋ハ扶桑才一乃

好風やしてん何處西遊を船が来すあり
海を今くはの舟三里湖江の深をたふ
島くの粒を盡して款ものハ天我指子
はもたは波子匍匐何よハ二才ふかきあり三
才ふあてしこくちあつれおにつらるる真る
何里抱る何り児孫もまがぬ一松の縁
こまやうふ枝まふけ風ふ吹たもあて屋曲おの
づららたあさるぐみ一艾草まかこ穴抱くこく
美人の顔を粧ふちハや拙神のむし
大山おののちもよりざのや造化の天工

いづれの入り筆をふたひ伺をききまむ
旗邊が破れ地つゞき〜海に出〜。時世ウム雲
居縁所のふたひの記産縁石るど有於
松の本陰ふ世をい〜ふ人も稀〜く之付
り〜く産種松をまゝおたりたるもの
菴園ふ住を〜い〜る人とハ志らぬを
がら先ちつ〜い〜まゝおぼふ月海ふ〜り
〜らあのがめ又何らたむ江上よゆ〜
宿を求れが定をひらき〜二階を借りて凡
雲の中ふ旅時き〜とハ何や〜きあで

めたる心遣はせらるれ

松名山や霞ふをかれぬ〜
〜ハ口をとぢ〜瀧らむ〜て〜ぬられず旧
産をわ〜る〜時まふ〜松邊の記何り原
安高松が〜まのわ新を繕ら〜
を解〜く〜のな〜且於凡〜子か
祭句何里

十一日瑞定さふ指當する三十二世の替るま
〜の平四島出家〜入夜〜
山寺は〜雪〜縁所の徳化〜

て七堂イ覺イ改イりイるイ金キ壁キ社シ教カ文ウをウ教カ
佛ブツ去キョ來ライ然ゼンのノ大ダイ伽ガ藍ランとトハハあアりリるル波ハ見ミ仏ブツ
あアのノさサらラづヅくクよヨやヤとト去キさサりリ。

十二日平和泉と心づク一河ぬハのノ松マツ陰カゲたタ久ク
のノ橋ハシるルどドずズ付ツてテ人ヒトはハ穢ケガレ小コ短ダン免ト葛カ葛カ葉ハ
はハ佳ヨシくクたタるルことトもモわワらラぬヌ千チ跡アトをヲたタがガ
へヘくク石イシのノ巻マキとトのノ流ナガみミ出デこコがガぬヌ花ハナ咲サキとト
よヨみミてテあアりリたタるル金キン花カ山サン海カイ上ジョウ小コ見ミりリにニ
数スウ百ハクのノ廻マヅ船ネ入ニはハつツどド入ニ入ニ人家ニヤ地チをヲあアらラるル
ひヒてテ寔マコトのノ疑ウタガハシ立タつツべベ什シたタもモ思オモいイうウけケぢヂがガるル

不フもモ来キぬヌるルうウなナとト者モノからカラむムとトまマれレどド更シ小コ宿シュク
うウ売ウ人ヒトなナしシ一イツ洲シュ了リョウとト一イツきキ小コ家カ小コ一イツ板イツをヲあアりリ
てテ明アキラきキババ又マタ志シらラぬヌたタまマあアひヒりリ神カミのノいイりリ
尾ビふフらラのノ牧カシまマのノ萱カヤ原ハラなナどドよヨふフめメみミくク
ぬヌたタるル提チをヲりリ心ココロあアらラるル長ナガ浜ハマみミをヲよヨくクたタ
伴トモアアとト云クニふフよヨ一イツ宿シュク一イツくク平ヘイ泉セン千チ一イツ宿シュク其ソノ
方カタ古コ余ヨ里リ不フどド一イツ宿シュク也ヤ

三代サンダイのノ榮エイ耀ヨウ一イツ眩クワンの中ノ中ナカ一イツくク大ダイつツのノ波ハ一イツ
里リこコあアりリるル相ソウ秀シュ衡ケイがガ波ハ田テン波ハみミおオてテ重シウ
窟クツ山サンのノ一イツ孔コウをヲ跡アトまマせセんン者モノ館カンにニのノがガれレハハ小コ

茶の湯おかりしく出羽の玉ふ越むとて此
幽然人稀るるあるれば糸をにりや
られく遊くく糸をとて大山をのやつ
日既暮るれば村人の家を見うけく、舎を
おむ三日風ぬほきくくし、るまき山中ふ
返る也

蚕乳馬のこ餅さる 枕もと

あるトのりよ是より出羽の玉ふ大山を傳
く及はざらばぬいたるべの人をれで
越たきよしをりさらくく人扱れ

付きバ突^{ツク}突^{キヤウ}の美者^{ミヤウ}御指をよくと一椀
の杖を携りく糸くが先ふまきくのりよと
る必何や〜らめふも何よべき日なれと辛
き思ひをな〜くほふついでゆく何〜の
をふたが〜で高山おれくと〜一冬のお汗
をりむ木の下圍後り何みでぬるけが
ぬ〜雲^{クモ}踏ふつちある心地〜く〜隙の中
踏ふ〜く水をり〜り岩ふ礫て肌又つめた
き汗を流〜く最上の産よお〜の葉内せ
しをの〜乃云や〜此及必子用のり有^{ツカ}美

たつらねりまのぬらとく仕合一たれとよ
ろこびくわんぬ依ふすてさへ物とぶろく
のしせ

尾花澤よては流とつふ者をるかれハ
るものたれども志いやくらび都ふもわく
かよひくさまぐの旅の情をもあつれバ日
比とめてち途のつくりはまづくよまてま
しゆる

涼一さを家者くくおまると
言出よのひやゲ下のひまればま
す

まのゆいさを傍うくみづのた

蛭切まる人ハ古代のまぐの 曾良

山形傾ふ立石寺と云山寺あり意覚大

師の字基よりく群よは深の地也一見屯

危さの一人このまむに依て尾花澤

よりとつて道一貫る七里むり之日ハま

著るが棟の坊ハ宿りりまぐ山の上のまふ

のなる定ふ岩敷をまぬて山と一松栢ま旧

土石老く苔滑ハ岩上の院く家を穿て

おの音きくとえびで山戸をめぐり山石城言守

八廿七
八廿八
八廿九
八三十
八三十一
八三十二
八三十三
八三十四
八三十五
八三十六
八三十七
八三十八
八三十九
八四十
八四十一
八四十二
八四十三
八四十四
八四十五
八四十六
八四十七
八四十八
八四十九
八五十
八五十一
八五十二
八五十三
八五十四
八五十五
八五十六
八五十七
八五十八
八五十九
八六十
八六十一
八六十二
八六十三
八六十四
八六十五
八六十六
八六十七
八六十八
八六十九
八七十
八七十一
八七十二
八七十三
八七十四
八七十五
八七十六
八七十七
八七十八
八七十九
八八十
八八十一
八八十二
八八十三
八八十四
八八十五
八八十六
八八十七
八八十八
八八十九
八九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
百

仏園をねし佳景寂莫とくくあつらふ
くのそねがゆ

志づくらんや 定ふまゝ 入蟬の巻

最上川のらむと大石田と云ふよ日おを待
たふ古き詠借の種とがれく忘れぬ花
のむしをまこひ 芦角一筋の心をやハ
らげはるよさぐりあしにて 新古あこたふ
ふとまのよとついでもみちしるべある人な
るれがわりたなきこをねしぬこのこみ乃
凡は定ふられり

家上川ハみちのくより出く山脈を水上とまご
てむたやぶさたなごをねらうき絶不有極愛
山のおを流て泉ハ酒田の海入た右山雨復ひ
幾その中お船を下せし平縮つたるをや
いる船くつふあらし白糸の流ハち糸糸の流
くお流く仙人を岸お流く立水とるごつ
く舟あや

五月ぬをたつあくお 上川

六月三日お黒山よのぞる 圖司左吉と云者
を尋てお市代守 賢何 閣利も 偈を南

谷の石段小舎———
麟麟の法もあふふ何
るトせらば

四日本坊小旅て 柳借具行

有秘や 雪をかをらきて 車谷

五日 龍次小指 南山 開闢 能除 大師ハガ
の代乃人ともさしををらぎ 延喜式小指 里
山乃 神社 有書 字 思の字を 里山 せとをを
まや 指 里山を 中略——— 指 里山 小指
出物といへるも 身の毛 指をけ 困の 眞小 然ると
風 ち 記 小 指とやらむ 月山 洞 居を 合く 三出

以 甫 衣 江 東 敷 小 屠——— 天台止観の
ら 小 田 松 軌 通の 法乃 新 げろひく僧
坊 採を たりべ 修 強 乃 法を 厲——— 吳山 雲地
の 強 効 人 貴 且 忍る 秘 学 宗 長 小——— めで
な 山 といふ つぎ———

八日月山よのぐる 本 徳 志 免 身 小 引 け 宝
冠 小 段を 危 強 力といふ きのよ 及び ぬれて 雲
霧 山 上 氣の中 小 氷 雪を 踏ぐ のぐる 小 八里
更 小 日 月 行 道の ち 小 入 入 小 何 ち 水
息 絶 身 小 ぐ ぐ 頂 上 千 鑿 水 日 没 ち

月照る筈を浦の露を掬くして却るるを
待日出く雲消水は河原を下る

谷の傍に船泊し屋と云有は西の船泊靈
水を掬て空に漂ふ一とく 鈿鼓打は月

山と路をゆく世に少くはらるる彼龍泉千
流を渾とくや 干将莫耶の昔を志くは及

に堪能の執阿さくらぬる 志くはたを志ふ
舞うけく志くはらるるど三尺たりある

様をつがこ羊にひらけるは里ふり積雪の
下小埋く春を忘れぬまぎらうの花乃心

わらな一 青天の梅花空ふかをるがめ
行そ僧正の哥乃氣もく干思ひ出く

秋まかりてそのゆあるは山中の微る海川者
の法式とく他を志るるを抄さば仍て

竹羊をどく失て記さざ坊ふかへは河原園
の需小依く三山明孔の句く短冊に年

涼一はや月の三日月れお志山
雲の峰いつつ出籠く月乃山

後ら水ぬ河原おぬらす 鏡うな
河原山 抄ふむたの 泪う那 曾良

相思をまろく、霧が嵐の襟らも山氏を初
と云もの、ふのちあふむうへら水て流借一卷
有左者もともた送りぬ川舟あふまろく、河田
の流あたる瀬底ふむろく、つ子登る沙の伴を
者とき

何つと山や吹浦うけく夕やぐみ
暑き日を海あつ水よりえ上川

江山水陸の風光彩をそくく今もあ深ふ
方寸をま具河田の流より東あの方山を
越破成傳ひひきごとをふろく、其際十里

日親や、かろく、以汝風を吹上る磯
朧くく名海の山うくる闇中、ふ莫他、
とるも又壽也とさびあ後の晴も又たのも
きく、雲の管屋小標をひひく、あの際
を待其於天能雲く、於日たふやう、あ
出る海どふ象深あふをうう、ふ先能因時
小舟をよせて、そま幽居の流をとあらひ
むくふの岸あふを何ぐら花の上ごく、とよ
まふ、横乃老木西行は、あは記念を
のく、江上あ、懐、何り神功辰あ、あ、水

眞居と云寺を干波^{カム}津^ツと云世をふり幸
 何り一りやまごやぞいりるるのやこの
 寺の方丈^{スガシ}を提^{ヒキ}た風景一
 の中^{ナカ}に海^{ウミ}と南^{ミナミ}の島^{シマ}海天^{ウツクシ}に
 たりてはふ何り西^{ニシ}のむやりの糸^{イト}路^ヂを
 かぎり東^{ヒガシ}に提^{ヒキ}た築^{キツキ}と秋^{アキ}田^タの西^{ニシ}の
 海^{ウミ}と平^{ヒラ}なまへは入^イる不^フたは
 と云江^エの横^{ヨコ}一^{ヒト}里^リと云り舟^{フネ}松^{マツ}崎^{サキ}の
 又^{マタ}異^イなり松^{マツ}崎^{サキ}の海^{ウミ}と云り
 むごめ一^{ヒト}寂^{シブ}しけおと一^{ヒト}をくたへく地^チ勢^{セイ}

魂^{タマ}をなやまをふり
 象^{ゾウ}浮^ウやるふ西^{ニシ}施^セが糸^{イト}の
 夕^{ユフ}越^ヒや雀^{カキ}種^{タネ}ぬきて海^{ウミ}涼^{スズシ}

五示禮

象^{ゾウ}浮^ウや、料理^{リョウリ}何^{ナニ}も小^コ舟^{フネ}に
 集^ツの舟^{フネ}や板^{イタ}を敷^{シキ}て夕^{ユフ}まで
 先^マ上^ウの睡^ネ鳩^{トビ}の鼻^{ハナ}をさる

彼^カこえぬ契^ケ何^{ナニ}りてやみさの鼻^{ハナ} 若^{ニホ}ふ
 河^カ田^タの余^ヨ波^ハ日^ヒをまて小^コ陸^{リク}道^{ミチ}のや小^コ屋^ヤ
 集^ツく乃^ノれも小^コ物^{モノ}をりてまて加^カ賀^カの

府まゝぐる世里とす華の床をさゆれ越
後の地小お川を改く越中の玉一ありの
床千到る時る九日暑^{ニヨ}湿^{シツ}乃勞ふ外を
なやほし痛おろりくつりを記さだ

又月や六日も常のおみ似ぞ

若海や依海よあこく天の河

今白ハ親しらギ子あらだたもどり駒匹一
たどぞ小國一の難ふを越くつりれ侍まきバ
枕川よをくし寐くるふ一间隔て面の方
千いれき女の夢二人ぞりりときさゆ年老

たるをのこ乃おも乗く物浪まをさけ
バ越後の玉^舞新^舞深と云ふの抱女成し侍務美
宮あるとくし床まをぐをたのまらりく
下まハ昔々よかへさ又まをくめくたをまきこ
倍るどしやまの白浪のよまを^{ニギハ}行ふ女をばま
らし一何まのこ乃世を何ままし下りてささ
なだ契日くの業^{ゴウ}同^{イム}いふつてあしとおまを
きくく寐今く何た旅立に家くみむ
くひてれ来まらぬ旅跡のくは何やりえ
来あしをくしく侍れ見えがくれまは

汝をまゝとひ侍むねの上乃ち情ふ大急の
 めどもなたれて流縁とさせぬと涙を流す
 子侯の了りよハるれども家くハふしとてど
 まる方おちし一人のけしまることくれべ
 罪ぬの加護かちくらむぞ美るるるをいと云
 て出つてゑはれまづらくやまのざりららし

一 下ッヤ 小お女もぬくり 萩と月

若るふにかくれはきるとめ侍るころへ四十八
 歳とらや野いらぬ川をわくりとけちとて
 浦ふ出擔花の若はら春をくらむとせぬ秋

のをえそふべきものをと人ふぬれはそよめ五
 つう侍ひしておのよの山陰にゆり花の昔ふ
 きうれのなれは昔の一本は者うまをれは
 一とつひをどきねてかぐのまふ入

わさのまやふ入たきみ海

卯の花山をりうらが谷をこえくまは
 七月中の五月く家ふた返り西よ高人何
 ちよと云者有るれが旅宿をとものや一
 と云ものハはるふまらるる名のちのづく
 くせふ急人も侍ひよまきまの冬ふせま

たゞとして其足進善を僕まふ

秋の風

何の若も庵ふいぎなりぬく

秋涼しき毎にむけや 瓜茄子

途中吟

何のくといふぬるくも秋の風

小松といふあまきく

志るらしき名や小松吹と秋まき

はふた田の神社よ信実ササキ舞モリが甲カブト狩の坊

何れ佳著源氏小属と一時美舞とよめた

はららと鈴おとらやがふも早土のまはり何らぞ

目メ衣イより吹フ返マりマ下カ菜ナからくらのりもの

金をちりば矢ハヤ流ハはハ湫クハ形ガタおとめさひ筆討

死の後木曾義仲形状にるえくけ社よこめ

ら小信コノブり極ヒゲ口の次ツギ角カドが供ツケをツくツもツま

の何れり縁縁記記ふみえり

むざむや左甲のト乃ききむぐき

山中の温泉にけりど白松シラノキが嶽タケ伝ツタふみる

く何れむ左の山降ヤマノリ小親コノサトたる者モノ何れ若山ニギヤマの

信シノ白シロ三ミ十ジュウ三サン不フ乃ノ明アカ形カタとけきをめみくほ

つゆ今紙のあやを

おもしろく酒にけり余は

五十丁山ふ入るく永平寺を往き及元禄御の
はさや邦撰邦撰の里を避く避かゝる山陰小徳を
のこしゆも事なきゆゑ有とや福井ハ三
里計あるバタ飯志くめく出るふたふん
の海たどくし一室ふ等裁と云古き恒士を
つづれのまより江にまりて帝をるるを十
とを餘りといふよ老はらむひくもや将死
るるよやといふ耳尋侍もまぶな命一

ろくしと女おゆ市中ひらうふり入るく何やの
小家ま夕息をちまの大えうりて難路たて
おくにたぶろをかききてハ世うちよこそと
門をおた徳げたる女の出るいづれどわ
たりぬふ及人のちぢもや何ぞハ世何ぞ
何げしと云もの、真中にけぬも一用あらざる
ぬつらふらぬが妻たるべしと志らる。むか
ものかこりふあるかゝる風情ハ侍はくやうて
何ふくその家小ニおこまゆりく名月ハつる
がのみちのこもたび立等裁も共つら送らむ

と語をのりかざりて、跡の枝折とらうれさ
漸白松が山嶽を以て比那が山をあらはるはは
むつのかげをわくわくく玉江の草六種子出に
はる常乃つ井城をて河尾峠を越き巴火と
が城かへる山小砂原をききして十四日夕ぐれつる
がの津小宿をもとむそのお月待又晴より
阿きの秋もかく阿るべきまやといへば越嶺の
習ふ程の秋の陰晴をわめがごとく阿は
小酒をくたらし水くと氣比のぬゆまお糸を
仲言ア天白玉の清と庭也社頭ゆきひて松

の本は石小月のまり入たるおまへの各砂をお
をぬるがごとく往昔に二世の上人たお後
起のり阿ゆくくづらるを刈ち石を荷
ひ泥浄をかきとて糸指往來の跡
古例今またえむ井おふま砂をそあふ
ゆきく水を掘りの砂指とや信ると亭
まのかくりなる

月清し掘りのもてる砂のこと
十五日直りまの白きふたがらむ降
名月や小園日お空あるた

